

現代小説クロニクル

日本文藝家協会編 the japan writers' association

中上健次 岬

田久保英夫 髪の環

富岡多恵子 幸福

三田誠広 僕って何

田中小実昌 ホロホロ

開高健 玉、砕ける

筒井康隆 遠い座敷

1975▶1979



現代小説クロニクル 1975～1979

the japan writers' association

日本文藝家協会 編

講談社



文芸文庫

げんだいしょうせつ
現代小説クロニクル 1975～1979

にほんぶんげいかきょうかい へん
日本文藝家協会編

二〇一四年一〇月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©The Japan Writers' Association 2014. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



ISBN978-4-06-290245-8

目次

岬

中上健次 七

髪の環

田久保英夫 一〇四

幸福

富岡多恵子 一二六

僕って何

三田誠広 一四四

ポロポロ

田中小実昌 二八三

玉、砕ける

開高 健 三〇七

遠い座敷

筒井康隆 三三三

現代小説クロニクル 1975～1979

the japan writers' association

日本文藝家協会 編

講談社



文芸文庫

目次

岬

中上健次 七

髪の環

田久保英夫 一〇四

幸福

富岡多恵子 一二六

僕って何

三田誠広 一四四

ポロポロ

田中小実昌 二八三

玉、砕ける

開高 健 三〇七

遠い座敷

筒井康隆 三三三

卷末エッセイ

解説

作者紹介

三田誠広

三三六

川村湊

三四〇

三四六

『現代小説クロニクル』編集委員

川村 湊／佐伯一麦／永江 朗／林真理子／湯川 豊

（日本文藝家協会編）

現代小説クロニクル 1975～1979

岬

中上健次

地虫が鳴き始めていた。耳をそばだてるとかすかに聞こえる程だった。耳鳴りのようにも思えた。これから夜を通して、地虫は鳴きつづける。彼は、夜の、冷えた土のにおいを想った。

姉が、肉の入った大皿を持ってきた。

「奥さん、一杯いかんかい？」管さんが、ビール瓶を片手に持ち上げた。

「酒はあかんのやよ」と、姉は、七輪の横に皿を置く。姉は管さんにでなく、コップ一杯のビールで顔を赧らめ、大きな体をまるめ、熱い息を吐いている彼の顔を見つめ、教えるように、「酒飲むと、頭が悪くなる血筋やから、恐ろして、よう飲まんの。弟の秋幸が飲んでるのみても、心配になるん」と言った。べそをかくように姉は笑^{えみ}をつくる。管さんは、はじめから飲むことを姉に勧めるつもりはない。人夫の自分たちにビールを供し、肉を取り寄せてくれたことに対する愛想の一つだった。

「飲みなあれ」と、彼の真むかいに坐った光子が、酔った声を出す。「たまに、親方の事を、

忘れて、ドンチャン騒ぎしようれ」

「あかん、あかん」姉は、笑を浮かべたまま首を振った。

「かまんのにい」光子は、よいしょ、と胡坐を組む。桃色のフリルのついたパンティが彼に見える。それを察して、隣に坐った亭主の安雄が、「かくせ、かくせ」とわらいながら、光子のまくれあがったスカートをひっぱる。光子は、「減るもんでなし、みせたるぐらい、かまんやないのう」と安雄の体を腕でこづく。「言うとかくけど、安雄、わしは、美恵ちゃんと違うからな。ちよつと知られた女やからな。これくらいなんやあ」

姉は、ビールの空瓶を持って、台所に行った。

玄関も窓もあけっぱなしだった。仕事を終え、親方の事務机が置いてある六畳の板間で、人夫たちが酒盛りをはじめた。その時、近所の子供たちが、何が始まったのだろうと、のぞきに來ていた。路地に面つきあわせて、車座になっているようなものだった。肉の焼けるにおい、親方の家の、鉄と土埃のにおいが、路地から吹き入ってくる風に払われる。すると隣近所の老人や後家が育てている草花のもの、溝のもの、それから急激にやって來た夜そのものの冷たいにおいがした。

安雄が、「飲め、飲め、頭が悪りてもかまんやないか」と、ビール瓶を持ち上げた。「誰もここに頭のええ血筋はおらんど」彼は、ビールを飲み干す。安雄は、注いだ。

「頭の悪い血筋は、わしのとこが一番」と光子が言った。肉をひっくり返していた箸に、ぽつと火がつく。「そんなこと言うたりしたら、兄さんにどつかれるけどな、ほんまに」へっと舌

を出す。

「親方は、頭は悪りことない。ええよ」藤野さんが言った。

「ええことあるかいな。あんたらは、自分の親方やから、ええと言うけど、あれ、正真正銘のわしの兄貴。都会弁で言うたら、うちの二番目のお兄さん。子供の時から、阿呆やなあ、と思て育てきたんや。うちが誰よりもよう知ってる」

台所から、「光子ちゃん、あんまり親爺の悪口言わんといてよお」と、姉の声がかかる。光子は、また舌を出す。ついでに、光子は、安雄に「誰がなんと言うても、あんたが一番、頭の悪り血筋やろなあ」と、頭をひとつはたく。「わしよりも悪りもんなあ。ひよつとすると、あんたの父さん、しょうもない女買うて、梅毒でもうつされて来て、出来た子と違うか？」

安雄は、へらへらわらっている。ビールでは酔いが体にまわりきらないのか安雄は全然、酔っていない。酒に酔っていない安雄は、猫のようにおとなしい。陽気だ。仕事もまじめだった。光子に、いいように振りまわされている。しかし酔うと、安雄は変る。

姉が、彼を呼んだ。彼は、台所に行った。「おまえ、もう酒、それくらいにして、ちよつと母さんとこまで一緒に行ってくれん？ 夜道、おそろしから」

「なにしに行く？」と彼は訊いた。酒で、声まで熱いな、と彼は思った。

「法事のこと。父さんの法事のこと」姉は言った。「姉やんのガードマンになってえよ。おまえのその体みたら、誰でもおびえん者はおらんのやから」

「美恵ちゃん、怖じくそたれやもんねえ」六畳の板間から、光子が口を入れた。「浜の家ら

で、絶対、よう住まんわ」光子は、人夫たちにむかつて、姉がどのくらい恐がりか、しゃべりはじめる。浜の家は、光子たちの父親が残した家だった。父親が死んだ後、いつのまにか、運送会社の事務員をしている一番上の兄の古市夫婦が住みついた。光子は、よく、「わしかて父さんの娘や。父さん、わしを浜の家へ住ませたかったんや」と、古市夫婦をなじった。浜の堤防のそばだった。近くに防風林があり、共同墓地があった。

「なにを光ちゃんは、言うんなよお。怖じくそなもんですか」姉は言うなり彼の手をつかんだ。「行く、行く。姉やんのガードマンや。すぐ帰ってくる。光ちゃんが、ちよつとの間、みんなに酒のましといってくれる」

「怖じくそう」と光子は言った。「そこがまた美恵ちゃんのかわいらしとこ。あの、古市と、あの嫁みたいに、心臓に毛がはえたのとは違うんやから。今度、親方が、浮気したら、わしが、美恵ちゃんの代りに締め上げたるからな」光子は、安雄の肩に頭をもたせかける。

夜気は冷たかった。踏み切りとは反対側に路地を歩いた。

姉は、小走りだった。姉の背丈は、彼の肩までしかなかった。彼は上着を、腹巻のように体にまきつけた。ちぢみの下着についていた汗が冷え、皮膚に触るのが、心地よかった。路地に縁台を出し、その上に鉢植えを置いていた。花がおった。路地をまがり、駅前からの通りを突っ切り、畑の中の道を歩いた。地虫が、また、耳鳴りのように鳴いていた。山の切り通しを

越えた。牛小屋の前を通った。「父さんの法事に、また皆んな来る」姉は言った。それから、ふと思いついたように、「秋幸」と彼の名を呼んだ。彼は、なまくらな返事をした。「光子と、あんまり親しいにしたら、あかんよ。姉やんはいややから。きょうだいでごたごたするの」「わかつとる」彼は言った。歩くたびに、作業着にした乗馬ズボンのこすれあう音がたつた。大きく股をひらいて歩いた。地下足袋は、音をたてなかった。前方から、軽自動車が走って来た。ライトが眩しかった。行きすぎるのを立止って待つ間、姉が、彼を見ていた。ガソリンの甘いにおいがした。「秋幸」と姉は、言った。「姉やんと、手つなご」姉は、彼の手を握った。「なんや、赤子^{ねね}みたいに」彼はふり払った。「怖^{おそ}じくそ、恐ろしんか？」

姉はまた手をつかんだ。「秋幸が、死んだ兄やんみたいな氣したんや。秋幸も、兄やんみたいに、手、つないでよ。兄やんが生きてる時、いつもこの道、手をつないで歩いて、母さんの家へ行つたんや。ここへ来ると、兄やんは、美恵、恐ろしやろ、恐ろしやろ、と訊くんや。こっちは全然、そんなことないのに。そう訊くから、思いついて、恐ろしなってくるの」くすくすとわらった。姉の手はつめたく固かった。

「うちの人と、うまいこと行っているのか？」ああ、うまいこと行っている、と彼は答えた。「うちの人、きつい事言うたりするんやろなあ」と姉は言った。返答に困り、彼は黙っていた。

親方の家から、ものの十分とかからなかった。母は、台所で、洗いものをしていた。母は、姉の姿をみつけるなり、「ああ、ええとこへ来たわ」と、タオルで手をぬぐいながら玄関に出て来た。「さつき、名古屋から、電話があつたばかりや」母は言った。「名古屋の芳子が、また

難し事言うんや、わしは長女や、と言うて、えらそうに文句つけるんや」母は顔をしかめた。

「義父おとうさんは？」姉は訊いた。

「おらん。寄り合いがあると言って、外へ行った。文昭は、アパートに帰ったし」母は、彼の顔をみて、「秋幸、早く飯食べて、風呂にはいれ」と言った。「ちゃんと風呂場に着替えも用意しとるから」母は、彼の顔が赧かへらんでいるのに気づいたのか、「また人夫と一緒に、酒のんだんか？ 明日になって、頭が痛いとか尻が痛いと言うても、知らんど」

「ほんのちよつとやねえ」姉が、彼を庇った。

「つきあいで、ほんのちよつとじゃ」彼が言うのと、「よっしゃ、ほんのちよつとやな」と母は、わらった。「まあ、秋幸も十五や十六じゃない、二十四にもなつとるんやから、ちよつとぐらい酒飲んでもかまんけどな」

「兄やんの死んだ齡やもん」姉は言った。姉は彼の体をみまわした。

「おうよ」と母は言った。卓袱台の前に坐り込んだ。妙に、母の体から力が抜けていくのがわかった。姉の眼が、蛍光灯の光を映していた。

「さつき、ここへ来る時、兄やんがおる、と思たんやだ。びっくりしたよ」姉は坐った。「よう似て来て」

「おうよ」とまた母は言った。「秋幸みるたんびに、思うよ」

彼は、母と姉のはなしをききながら、飯を食った。母と姉は、父さんの法事の話をしていった。いまさつき、名古屋の芳子から、義父おとうさんの家で、父さんの法事をするのはおかしくない

か、と言ってきたのだった。父さんも義父さんも、彼には血のつながりはなかった。兄とも姉たちとも、母の血でしかつながっていなかった。土方請負師でもないのに、乗馬ズボンをはき、サングラスをかけたあの男が、彼の男親だった。獅子鼻で、体だけがやたら大きくみえるあの男。彼は、母や姉たちが、父さんの事を口にするたびに、あの男のことを想い浮べた。あの男とは、町なかで、たまに出会った。話しかけてきた。一言、二言、話を交わした。それ以上、話さなかった。彼は、体つき、顔の造りが自分と似ていると思った。そう思い、それを認めるたびに、一体そんな事がなんだ、と彼は思った。あの男に関する噂は、知っていた。新地に若い女を囲っている。いや、この姉は、それは確かに彼の腹違いの妹にあたる女だと言った。あの男が、相前後して三人の女に産ませた子供のうち、女郎の腹にできた娘らしかった。それが成長して新地にやってきた。このところ、男はとみに裕福になった。山林地主から山をまきあげた、土地をまきあげた、と噂が、耳にはいった。「ひどい人間もおるもんやねえ」と誰かが言ったのを、彼はいつでも、あの男を想い浮べるたびに思い出す。

飯を食い終っても、まだ話していた。二人の話が続いている間に、と、彼は、風呂に入った。体中が土埃のためにざらざらしていた。腰のあたりから、色がはつきり違ってなまっ白かった。腰から上は、日焼けして黒かった。湯を何杯もかぶった。

離れの四畳半が、彼の部屋だった。壁に一枚、女優のグラビアが貼ってあった。他になにも